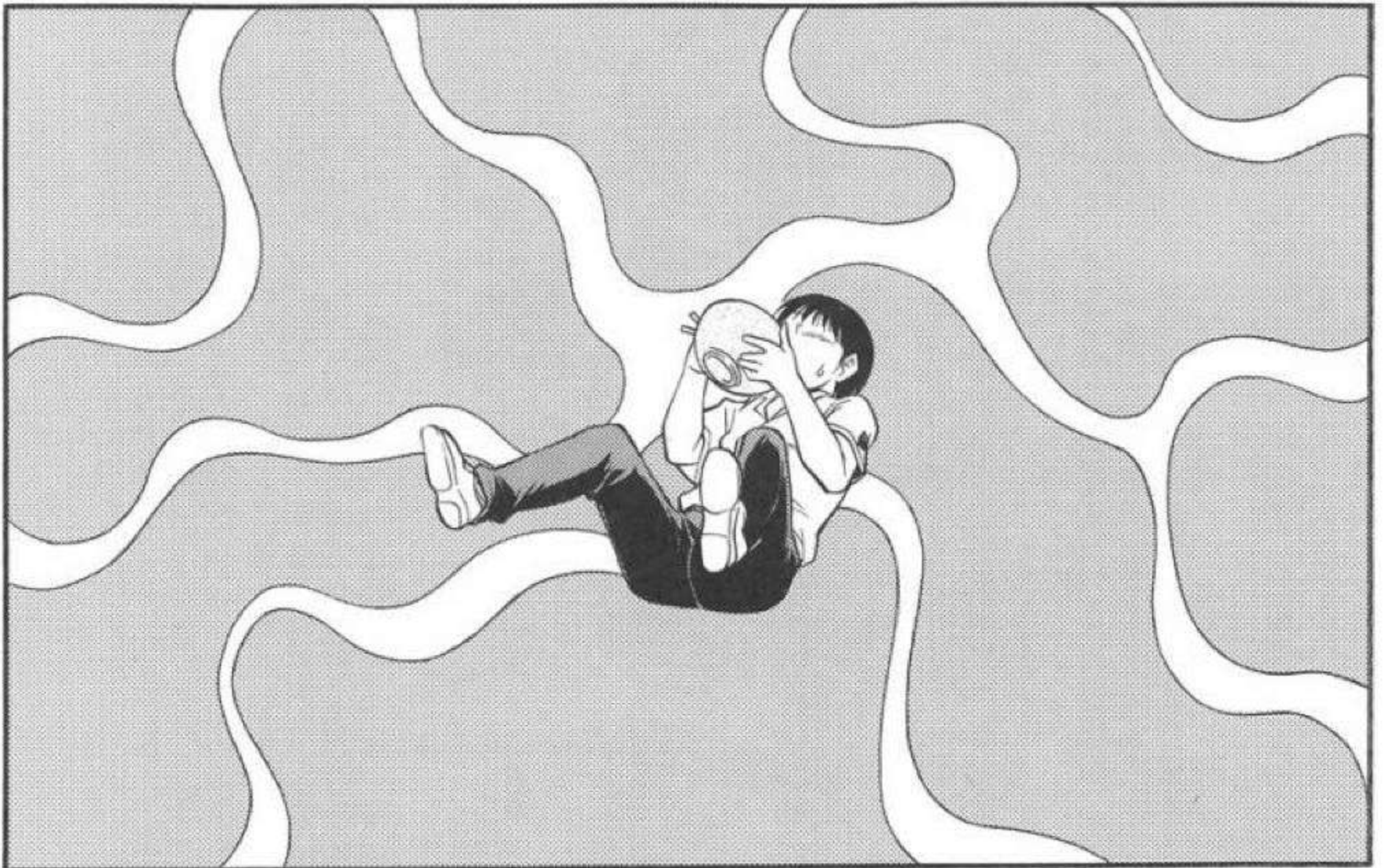


キス
は
逃
げ
の
ま
ま
に
楽
ま
き





まえがき

『キミキス』をプレイして、どうしても納得できない点があります。それは今回から導入された『話題袋』の『話題アイテム』についてです。『話題アイテム』は最初から使えるものだけでなく、ヒロインや友人や先生との会話で使える数が増えていきます。更に、特定のイベントを発生させたり、ヒロインとのハッピーエンドを迎えることでなければ入手することが出来ない『話題アイテム』まであるのです。

しかし、ここまで手の込んだことまでやっておきながら、肝心なアイテムが存在しないのですよ！ 何故！ 『キスをする』という『話題アイテム』が存在しないのですかっ！

CGは使い回しでもいいですよ！ キスできるのは既に通常のイベントでキスをした後でもいいよ！ 場所によってはそのコマンドが無効でもいいよ！ それでも、それでもっ、俺は自主的にキスをしたかった…！

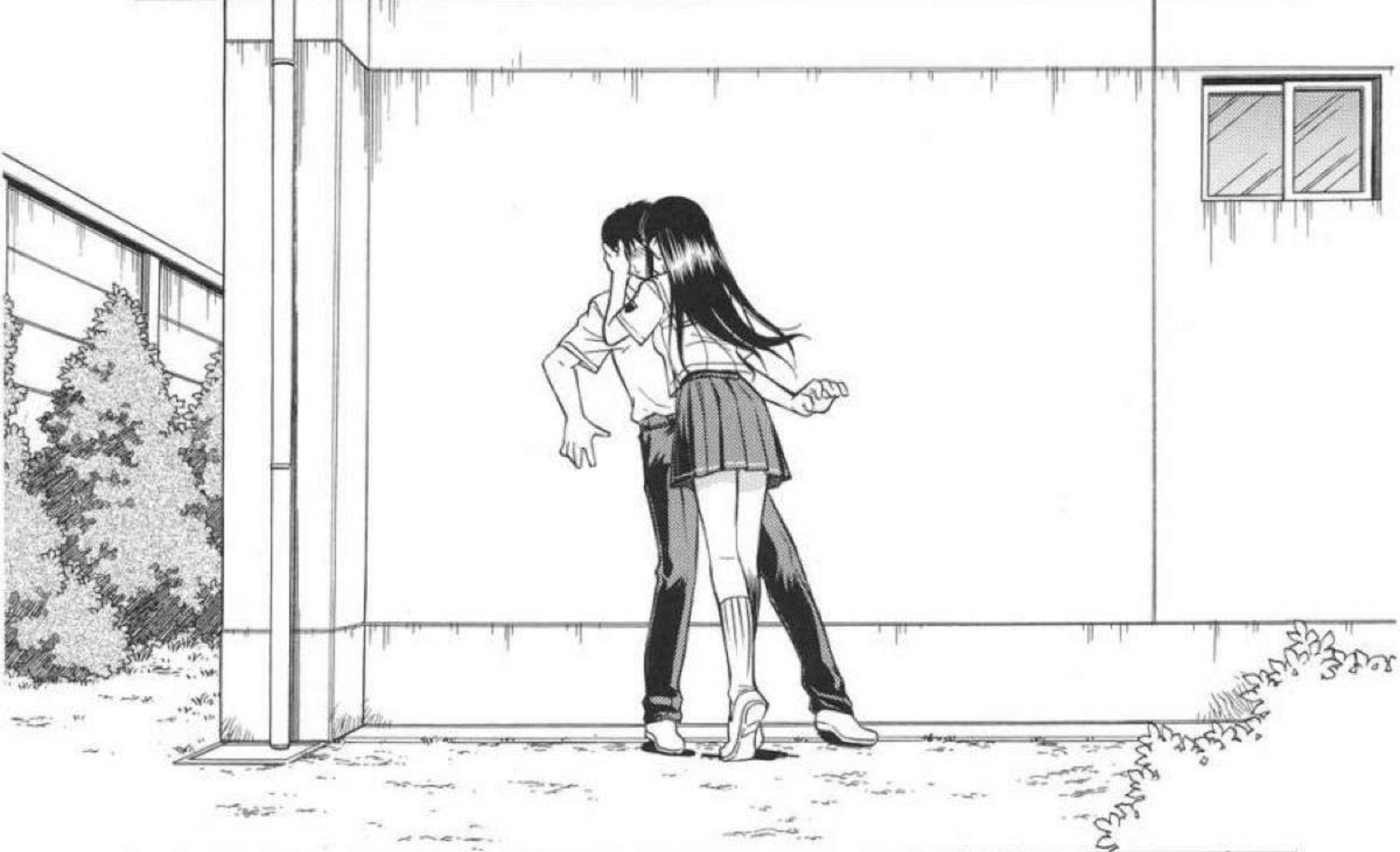
えー、図々しくもこんなことまで求めてしまうほど『キミキス』は素晴らしゅうございました。キャラ良し、シナリオ良し、システム良し、声優良し、音楽良し、CG良し、妹良し。そんなわけで今回は予定通り『キミキス』本でございます。



MAIN Illustrations&Comics
かねこ としあき

MAIN Words&Editing
田野 弘高

Special Guest
篤見 唯子(薄荷屋)

















「へへへへ
なるちゃん」

「ウンすごいよ
ササマちゃん」

「お兄ちゃんか
私の口の中で
イっちゃったよ」

「やんっ」



「ヌルヌルだね顔
ササマちゃん」

「ねえ
たのろちゃん
見た？」



「お兄ちゃんの
イワ時の顔
あ」

「ウン：
先パイ真赤に
なるこ」

「あ」

「キヤあ〜x2」

「う？」

「おの前らア
〜！！」

「カアア」







嬉しいのです
先パイイイ...

い...痛い
ですケドオ...



いっ



キキッ

い...
あ...あ...



ひ
いっ
いっ

ビクッ



大丈夫?
なまめちゃん

ひっ...
いっ







うああー
菜々ちゃん



だいたいな所か
やあらかくこ
いやらしくこ...

あー

すごいよ
2人のか...

オしすごい
気持ちイイト。

やあ
ああ

ん

うわあ

ニチャ

ん

ニチャ







二人で半分コ
しようね♡

わし。

わっ



良かったよあえ
たまるちゃん



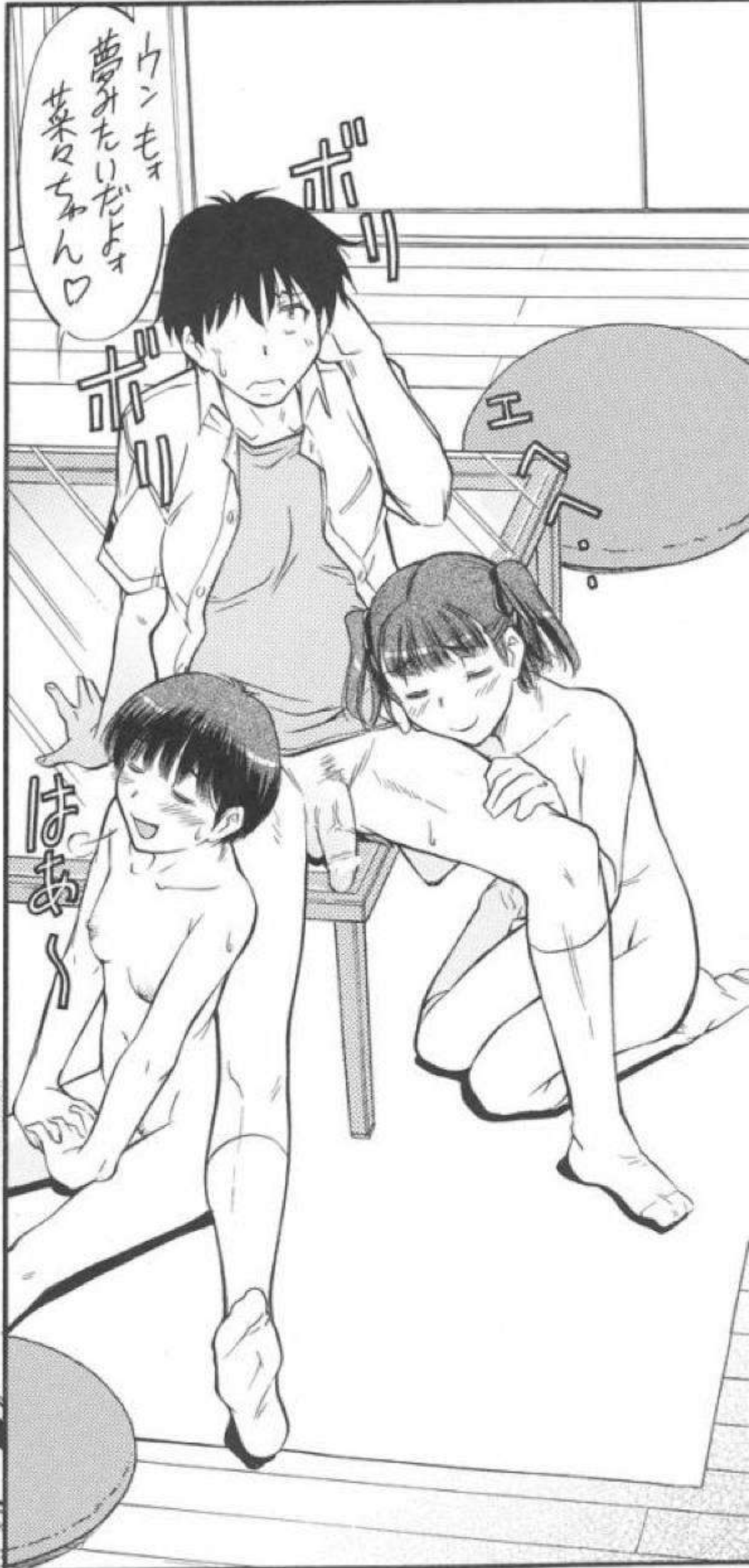
ウン！
一緒にしようね

ぐ。

ちま



おま
お前さま！！



ウンモ
夢みたいだよ
たまちゃん♡

はあ



ね〜♪
x2

それは恋の味見

何もかもがうすぼんやりとしていた世界の先で、何かが僕を導くように輝いていた。

これは……臭い。いや、香りだ。柔らかい香りと、さわやかな香り。二つの香りが僕の意識にささやきかける。

その香りは、よく知っている香りだった。柔らかい香りも、さわやかな香りも。だからこそ、僕はその香りに引き寄せられる。

次は、触覚だった。頬に当たる、くすぐったい風。吹いて、止まって、吹いて、止まって。とても弱い風が、一定のリズムで僕の頬に当たっている。

これは、人の息だ。誰かが僕の顔にわざと息を吹きかけているのか、それとも息がかかる程に顔を寄せているのだろうか。

そして僕がわずかに瞼を開けると、目の前に唇が見えた。これは、彼女の唇――。

そう思った僕は手を伸ばして目の前の彼女を引き寄せると、彼女の唇と僕の唇を重ねた。出会った時はいつもそうしているように。

「ん？」
しかしキスをしてから数秒の後、僕は違和感を感じた。そして更に次の瞬間、

「きゃああああ！」
大きな悲鳴が僕の部屋に響いた。

えええっ?! な、何で僕の部屋なんだ? いや、朝なんだから僕が僕の部屋にいるのは当たり前なんだけど、だったら何故朝から彼女が僕の部屋に? どうして彼女が悲鳴を?

思考がぐちゃぐちゃになった僕を現実に戻したのは、ベッドから見下ろした床に妹の菜々が両手で口元を押さえながら座り込んでいる姿だった。

「な、菜々っ?」
「ううううっ……」

僕の呼びかけにも、菜々は反応しない。手で押さえた口元から、弱いなり声がこぼれるだけだ。

「どこか怪我しなかったか? ぶつけなかったか? お尻は大丈夫か?」
やばいやばいやばい。いくらなんでもこれはやばい。とりあえずは何

か言わないと。

「あのさ……寝ぼけてたんだ、ごめん」

「お、お、お」

「お?」

「お、お兄ちゃんのぼかーっ!」

当然といえば当然の言葉を叫んで、菜々は僕の部屋を飛び出していった。

文化祭から半月程経った、平日の朝のことだった。



「えーっ! 菜々ちゃんにキスしちゃったの!? 何でまた!」

信じられない大寝ぼけをしやらかしてしまった僕は、このことを唯一相談できそうな『彼女』を休み時間に学校の屋上に連れ出した。そしてことのあらまし(といても「寝ぼけて菜々にキスをしてしまった、菜々に『馬鹿』と言われて逃げられた」というだけなのだけど)を話したところ、またもや当然の反応をされてしまった。

「何でって言われても……何でだろう。寝ぼけてたんだからなんだけど、一体何がどうしたら寝ぼけて妹にキスするのか、自分でもわからないよ」
「もしかして、単に前から菜々ちゃんとキスしたかっただけなんじゃないの?」
「もう、すぐそういう冗談言うのやめろよな」

「んふふふ、ごめんごめん」
本気で謝る気があるかどうか怪しい口調で謝罪する彼女だったが、表情はそのままですぐに真面目な口調になる。

「ともかく、菜々ちゃんにはすぐに謝ることね」
「また謝った方がいいのかな? 一応、寝ぼけてたって説明はしたんだけど」

「当たり前でしょう? 菜々ちゃんくらいの年頃はいちばん感受性の強い年頃なんだからね。ましてや相手は女の子なんだから、あなたが自分でどういうつもりだったかなんて関係ないのよ。寝ぼけていようがいまいが、悪気があるうが無かろうがね。女の子を傷つけてしまったら、とことん謝る。相手が妹でも同じよ」

なるほどそんなものなのか、と思った。実はここ数年、菜々のことが時々わからなくなることがある。ずっと一緒に暮らしてきて、年も一つしか離れていなくて、同じ学校に通っていて……。だからいつも僕が考えているように菜々も考えているんじゃないかと勘違いしてしまうことがあるのだ。

だから最近では彼女に、菜々のことで相談することがある。さすがに今

回みたいなことで相談するのは初めてだったけど。

「うん、そうするよ、ありがとう」

僕はお礼を言つて、そして言葉だけでなく態度でも感謝を伝えようとして彼女の顔に僕の顔を近づけようとする。しかし、

「駄目よ、人がいるから、ね」

彼女の指先が僕の顎を軽く押して、かわされてしまった。振り向けば確かに、少し離れた場所に数人の女子生徒達の姿が見える。

「それに、キスはもう朝にしたでしょう、菜々ちゃんね」

あんまりなことを言われて、思わず全身から力が抜ける。

「あれを数の中に入れてよ……」

「うふふ、罰よ。今日はお・あ・ず・け」

その罰、結構厳しいんだけど……



「菜々、今日、一緒に帰らないか？」

「うん、別にいいよ……」

「じゃ、じゃあ、放課後に校門でな」

昼休みに一年生教室までわざわざ出向いて捕まえた菜々と、普段と同じようにいくつか会話を交わしてどうにか一緒に帰ろうと約束をしたけれど、やはりその返事はどこかきこえないものだった。

そして肩を並べての下校中の会話も空々しく、ましてや歩きながらでは朝の出来事には触れようもなかった。かと言って、このまま家に着いてしまったのではわざわざ一緒に下校した意味がないので、あまり乗り気ではない菜々を強引に誘って公園に寄り道して、僕はやっと切り出すことができた。

「あのさ、今朝のことなんだけど」

「……………」

さっきまではきこちないながらも言葉を交わしていた菜々も、僕のその言葉で無口になる。表情も笑顔が消え、硬いものになった。やっぱり、気にしてないわけがない。少しでも「謝らなくても大丈夫じゃないのか」なんて考えた自分が恥ずかしくなる。

「本当に、ごめんな。申し訳ない。いや、謝って済むことじゃないかも知れないけど、それでも謝らないわけにはいかないだろうし」

「……………」

「わかっていると思うけど、わざとじゃないんだ。寝ぼけていただけなんだ。そうでなければ自分の妹にあんなことしないって」

「……………」
僕の見苦しい弁解の間も、菜々は少しうつむいてただ黙っているだけ

だった。怒っているのだろうか、悲しんでいるのだろうか。それすら分からなかった僕は、ただ謝るしかなかった。

「自分でも、何であんなことをしてしまったか分からないんだ。ただ、菜々がそこにいて理解していなかったとは思う」

「……………」

「突然あんな事をされて、怒るのも当然だと思うし、傷ついていてもいると思う。だけどあれはデコちゅーと同じようなものだと思って欲しいんだ。初めてだったかも知れないけど、兄妹なんだからそう考えて気にしない方が……」

「ちがうもん……」

そこで初めて、菜々が口を開いた。

「デコちゅーとは違うもん！ 今朝のお兄ちゃんのキスは、今までわたしがお兄ちゃんにしてもらったデコちゅーとは全然違ったもん！」

菜々が顔を真っ赤にして叫ぶ。

「し、仕方がないだろ、場所が違ったんだから、デコちゅーとまったく同じってわけにはいかないだろ」

僕も顔を真っ赤にして反論する。そりやそうだ。こんなこと言つて、顔が赤くならないわけがない。

「場所だけじゃないもん！ あのキスは兄妹のキスじゃなかったもん！ あれは、あれは、好きな人にするキスだったもん！ 恋人同士の、大人のキスだったもん！ お兄ちゃん、恋人出来たでしょ！ その人とキスしているでしょ！ わたし、あのキスでわかつちやつたもん！」

更にとんでもないことを菜々が言うので、こっちは聞いているだけで更に顔が赤くなる。

「ば、馬鹿っ！ 何言ってるんだお前！」

「バカはお兄ちゃんだもん！ なによ、いっつもわたしを子供扱いして、自分だけ！ わああああああん！」

「自分だけ……」

呆気にとられる僕を残して、菜々は一人で公園を走り去ってしまった。僕はしばらくその場で動けずに立ちつくしていた。公園に他に誰もいなくて、本当に良かった。



「あーはっはっはっは、まさかそんなことを言われるなんてね」

「笑い事じゃないよ、まったく」

そして僕は翌日のお昼休みにまた屋上に彼女を呼びだして、昨日の公園での菜々とのやり取りを説明した。

「まあ菜々ちゃんとしては、大切なお兄ちゃんと自分との間に距離が出

来てしまったような気がして、寂しいんでしょね。あなただけが大人になっちゃったような気がして」

「僕だって菜々は大事な妹だと思ってるけど、いつまでも同じようにってわけにはいかないからなあ。でも、今回みたいなのは例外中の例外だよ。こんなのは距離というより溝だよ、ミ・ゾ」

頭を抱える僕に彼女は、それから菜々と話せなかったのかと訊ねる。「話せないどころか菜々の奴、昨日の晩は夕食の時も部屋にこもって出てこなかったし、朝は朝で一人で早起きして一人で朝食食べて一人で登校したから、姿すら見ていないよ。明らかに避けられているから、謝ることすら出来やしない」

「菜々ちゃんがもうちょっと大人になれば、話が早いんだけどね」

「でもこの場合の『大人』って広い意味じゃなくて、菜々に恋人が出来たりとかそういうことだろ？ それっていつの話になるんだよ。あいつこの前もラブレターももらったのに断つたらしいぞ。相手は結構格好良かったらしいのに」

「よく知ってるわねえ……。まあ、時間が経っても普通に頭が冷えるとは思うけど、とにかく隙を見て菜々ちゃんとお話をすること」

「しばらく様子を見る、じゃないんだね」

「そうよ。どんな時だって、話しかけてもらえないのってすごく寂しいんだから。これは、わたしの経験談。放っておいて欲しいなんて言う人もいるけど、あんなの嘘。自分が落ち込んだり怒ったり悲しんだりしている原因となった相手でも、精一杯謝ったり言い訳してもらったりした方がいいに決まってるわよ」

「あ……うん。わかった。どうせ同じ家に住んでいるんだから、部屋に押し掛けてでも話しかけて、理解してもらおうようにするよ」

我ながら頼りない兄貴だと思う。結局、また彼女に後押しされて決心しているのだから。でも、こちらからも一つ提案させてもらおう。

「でさ、せっかくなんだから一緒に説明しない？」

「へ？ 一緒について？ わたしが？ 何を？」

「うん。どうせ僕に彼女がいることを菜々が気付いたみたいなんだから、僕たちのことを二人揃って菜々に説明を……」

「だ、駄目よ！ 駄目！ まだ駄目！」

僕の提案だけでなく言葉そのものすら拒むように、彼女は手を大袈裟に振って言う。

「何でだよ。そろそろ僕たちのことを話さないといけないと思ってるよ。そろそろなんだし、この機会にきちんと説明しておいた方がいいと思わない？ それに前に話したじゃないか、僕たちがつきあっていることは、二人揃って菜々に説明しようって」

「そ、そうなんだけど……恥ずかしいもの」

「うわ、ここまで来てそんなこと言うかな」

「だってだって、菜々ちゃんが相手なんだもの。友達に紹介するのは訳が違うわよ」

「そんなものなのかな」

「そりゃそうよ。あなただって、わたしを友達に紹介するのと菜々ちゃんに紹介するのとじゃ全然違うでしょ？」

「……確かに、友達に紹介する時は『男子生徒憧れの的』ってイメージがあるから緊張するかも知れないけど、菜々が相手ならどっちも家族みたいなもんだから緊張しないと思う」

「……何かむかつくわね」

「だって本当にそうなんだからしょうがないじゃないか。で、やっぱり駄目？」

「うーん……どうしてもって訳じゃないけど、まだちょっとね。それに、あんなことがあった直後なんだから、あんまりタイミングとしては良くないと思うんだけど？」

「僕は逆に、今だからこそきちんと全部説明した方がいいかな、と思うんだけど、残念だな……」

普段はノリの良い性格の彼女だけど、いざという時に意気地がなくなってしまうことがあるのも十分承知していたので、とりあえず今はこれ以上追求しないことにした。

「それにしても、あなたのキスがそこまで大人になっているなんてね、驚きだわ」

さっきの話の流れで僕にイニシアチブを取られたのが気に入らなかつたのか、急に年上ぶって言う。

「なに言ってるんだよ、僕のキスのことは全部知っているじゃないか」

「おおっ、言うわねえ」

くすくす笑う彼女。先程とは違い、このくらいのことではまったく動じない。

「本当だよ。なんなら、確かめてみる？」

僕は辺りを見回して今日は誰もいないことを確認してから、彼女の両手を取って軽く引き寄せてキスをする。

まず軽く触れて、それから熱く。彼女の唇に僕の唇を重ねるだけで、彼女の心のすべてが伝わってくるような気がする。僕の心の一部でも、彼女に伝わっているだろうか。唇だけでなく、わずかに触れる髪や吐息、そして彼女の香りが……

「あっ！」

僕はあることに気付いて、キスの途中だというのに声を出してしまった。

「も、もう！ 何よ！ マナー違反よ、ムードぶちこわしじゃない」

すっかり拗ねて上目遣いで訴える彼女だったけど、それどころじゃない。僕は、今気付いたことを彼女に説明する。それを聞いて最初は憮然としていた彼女も表情が崩れて、乾いた笑いが出始める。

「あー…あ、あはははは、そう言えば、確かに菜々ちゃんはそうだったかも」

「やっぱそれが原因なのかな？ それで原因で、僕は菜々にキスしちゃったということ？」

「そ、そうかもね。…何よ、その顔は」

彼女は自分から僕に絡んできたけれど、それが逆に自分でばつが悪る

と思っていると白状しているようなものだった。

「いや、別に。ただ、こうやって原因が分かったからには、菜々にはちゃんと説明しないとイケないと思ってるさ」

「……………」

「で、どうして菜々にキスしちゃったか説明するには、僕の恋人が誰か説明しないと駄目だよな、と思ってるね」

「……………」

「……………」

「わ、わかったわよ、今日の放課後、あなた達の家に行くわよ。ううう、ひどいわひどいわ、昔はもっと優しくかったのに…」

そんなことを言う元気があったら、今日の菜々への説明は一人でやっても大丈夫なんじゃないだろうか。



玄関から大きな声で呼んでみる。

「ただいまーっ、おーい菜々、帰ってるんだろ？」

玄関に靴が出しっぱなしなのだから、帰っているに違いなかった。だけど返事はない。自分の部屋にいるのだろうか？ そう思って玄関を上がリリビングに入ると、着替えもせずに制服のままソファに埋まるようにしてテレビを眺めている菜々がいた。

「おい、菜々、いるんだったら返事くらいしろよ」

「返事しないもん、菜々、子供だからテレビに夢中だもん」

そんなことを言っているけど、テレビが映しているのは『レディス4』だ。菜々が夢中になるような内容とはとても思えない。やれやれ、相当

ヘソを曲げられてしまったらしい。

「そんなこと言っていないで、ほら、お客さんだよ」

「えっ？」

「おじやまします、菜々ちゃん」

そう言って僕の後ろから顔を出した彼女を見て、菜々の表情が一変す

る。

「摩央お姉ちゃん！」

「ふふふ、このおうちで会うのは何年ぶりかしらね」

「えっと、えっとね、三年…五年…もっと、もっと久しぶりだよ！」

「ごめんね、なかなか来れなくて」

「どうして来てくれなかったの？ 最近は学校でもよく話すようになったから、家にもすぐ来てくれると思ってたのに」

菜々は文句を言うような口調だったけれど、表情はとても明るい。

「うん、ちよっとね」

それに対して摩央姉ちゃんもやはり明るい表情ではあったけれど、気づかしさもあるのかどこか緊張した面持ちだった。

「それより菜々ちゃん、お兄ちゃんにひどいことされたんですって？」

「ちよっと待ってくれ摩央姉ちゃん、いきなりその切り口はないだろう。」

「えっ！ お兄ちゃん、摩央お姉ちゃんに話したの!? どうして!？」

菜々、お前もツツコミどころはそこか。

「ごめんなさいね、菜々ちゃん。お兄ちゃんは、他に相談する人がいなかったのよ」

「うううー、それにしてもあんな恥ずかしいことを人に話すなんて、ひどいよお兄ちゃん」

「たった一人のかわいい妹に嫌われたかもしれないって、泣きそうな顔でわたしのところに相談に来たのよ。本当に泣きたいのは菜々ちゃんの方なのよね」

「そうだよ、わたし本当にショックだったんだからね！」

「本当にデリカシーのないお兄ちゃんね」

「そうだ！ お兄ちゃんはデリカシーないんだ！」

「ちよっと待った摩央姉ちゃん、菜々を煽るためにウチに来たんじゃないだろ。菜々に説明することがあるから来たんだろう」

放っておくとずっと続きそうなので、会話を強制的に修正させてもらうことにした。

「あ、ごまかせなかった？」

摩央姉ちゃんがわざとらしく笑う。

「ごまかされないって」

「説明？ わたしに？」

菜々がきよとんとする。

「そうなの。あのね菜々ちゃん、この前わたしが使っているシャンプーを教えてあげたけど、今もあれを使っているかしら？」

「うん、ずっと使ってるよ」

「それから、分けてあげたコロンは？」

「あれもすごく気に入って、ちゃんと自分で新しいの買ったよ！」

質問の真意もわからず、明るく答える菜々。ああ、やっぱり……。

「ごめんね菜々ちゃん、あなたのお兄ちゃんがあなたにキスしたのは、もしかしたらそのせいかもしれないの。寝ぼけている時にそのシャンブーやコロンの香りを嗅いで、わたしと菜々ちゃんを間違えたからキスしちゃったのかもしれないの」

「え？ どうして？ なんてわたしと摩央お姉ちゃんと間違えて、お兄ちゃんがわたしにキスをするの？」

「あ、摩央お姉ちゃん、菜々のやつ理解できてないよ」

摩央お姉ちゃんとしては今の説明で察して欲しかったみたいだけど、菜々が相手ではそれは無理というものだった。

「……あのね菜々ちゃん、今回のことでああなたのお兄ちゃんに恋人がいるんじゃないかって思ったみたいだけど、その恋人ってわたしなの。わたしたち、今、おつきあいしているの」

「……」

「摩央お姉ちゃん、もう一声」

「ああん、もう勘弁してよ。あのね、あのね、菜々ちゃんがわたしと同じシャンブーとコロンを使っていたから、寝ぼけていたお兄ちゃんはその香りで菜々ちゃんとなつたのを間違えて、その……いつもわたしとしているように、キス、しちゃったのよ、菜々ちゃん。もう！ これ以上はあなたが説明しなさいよ！」

「……」

「摩央お姉ちゃん、菜々のやつ理解するまで時間かかるみたいだから、ちよつと待って」

「……ええっ！」

「あ、理解したみたい」

「えーえーえー！ 摩央お姉ちゃんが！」

「うん、そうなの……」

「恥ずかしそうな摩央お姉ちゃん」

「お兄ちゃんと！」

「そうだ、文句あるか」

「開き直る僕」

「あー、ああ、そうなんだ……。うん、わかった……」

瞬間的にパニックを起こしていた菜々だったけれど、すぐに悟りを開いたかのように落ち着いてしまった。正直、こうなると逆に心配なくらいだ。

「菜々、驚いたか？」

「うん、びっくりしたよ。でも、イヤじゃない。摩央お姉ちゃんのこと大好きだから、摩央お姉ちゃんだったからお兄ちゃんの恋人でもそんなに悔しくないと思う」

「『そんなに』なのね」

摩央お姉ちゃんが少し笑って言う。僕は聞こえなかったフリをすることにした。

「だけど本当にびっくりしたよ。ねえ、いつからなの？」

「正式におつきあいを始めたのはこの前の文化祭からで、きっかけはそれから更にひと月前くらいなの。まあ、昔からお互いに意識はしていたんだろうけどね」

「まだ少し恥ずかしそうに、摩央お姉ちゃんが話す」

「そっか、結構最近なんだね……。やっぱり、摩央お姉ちゃんもお兄ちゃんもどんだん大人になっちゃうんだな……」

「寂しそうに言う菜々」

「そんなの、仕方がないじゃないか。菜々だって少しずつ大人になっていくんだから一緒だろ」

「ううん、そんなことない。だって、摩央お姉ちゃんが高校生になってから急に大人っぽくなったけど、わたしは全然大人にならないもの。それに、昨日のキスだってそう。ずっと一緒に暮らしているお兄ちゃんだって、あんなわたしの知らない大人のキスを知ってたじゃない！ ずるいずるい！ 自分ばかり！」

「ちよつと待て菜々、お前が昨日から怒っているのって、僕にキスされたことに対してじゃなくて、僕がその……お前が言うところの大人のキスを知っているからなのか？」

「そうだよ！」

「そ、それで『自分だけ』って言ったのか……」

「な、なんだそりゃ！」

「ずるいずるい！ わたしにも大人のキスを教えてよ！」

「そ、そんなこと出来るわけないだろ！」

子供みたいに大人のキスを教えてくれと駄々をこねる菜々に僕があわてていると、

「あら、出来るわよ」

そう言ったかと思うと摩央お姉ちゃんが僕の横をすり抜けて、菜々の体の上に覆い被さり、そしてキスをした。

「んっ！」

突然のことに菜々は硬直している。

「ま、摩央お姉ちゃん？」

僕の呼びかけも意に介さず、行為に集中する摩央お姉ちゃん

「んーっ！ んーっ！ んーっ！」

「パタパタパタ」

さすがに自分が何をされているのか理解したのか菜々が摩央お姉ちゃんの背中をギブアップのサインのように叩き、それを合図に摩央お姉ちゃん

は菜々から離れた。

「どう？ 菜々ちゃん。これが最高の大人のキスよ。わかった？」

「…よくわからない」

ぼーっとしてゐる菜々。昨日僕がキスしてしまつた時はただ驚いてゐる感じだったけど、今度は魂が抜けてゐる感じだ。

「そう、それでいいのよ。急に大人のことを何でも知りたがつても無理よ。あなたから見ればわたしは急に大人になつたように見えたかも知れないけれど、お化粧だつてファッションだつてひとつひとつステップアップして行つたんだから。私たちは菜々ちゃんに色々教えてあげられるけど、菜々ちゃんが理解するには同じようにそのステップをひとつずつ登らないといけけないの。わかつた？」

「はい…」

「あの、摩央姉ちゃん、いくら何でもやりすぎなんじゃ…」

「あれ？ 妬いてるの？ わたしに？ 菜々ちゃんに？」

「いや、そういうことじゃなくて…」

駄目だ、やっぱりまだまだ摩央姉ちゃんにはかなわないような気がする。キス一つでここまで思い知らされるとは思わなかつた。しかも、自分ではなくて妹へのキスで…。

「それから、シャンプーとコロンは別のに変えた方がいいかも知れないわね」

「はい…」

「もう間違えないって！」



「あのね、お兄ちゃん」

「ん？ どうした？」

「摩央お姉ちゃんと恋人になつてくれてありがとう」

うちで夕食を食べた摩央姉ちゃんを送り出した後、菜々がそんなことを言ひだした。

「まさかお礼を言われるとは思わなかつたよ」

「だって、わたしもせっかく摩央お姉ちゃんと同じ高校に入れたのに、前みたいに話したり出来なくなつて、これから先もずっとこのままだったらどうしようって思つてたの。でも、少し前から摩央お姉ちゃんの方から話しかけてくれるようになって…。それって、お兄ちゃんと摩央お姉ちゃんが恋人同士になつたからなんだよね」

「まあ、多分な。でも、お礼を言うなら僕だけじゃなくて摩央姉ちゃんにも言わないとな。僕と摩央姉ちゃんが前みたいに話すようになったのは、摩央姉ちゃんの方から話しかけてきたのがきっかけだったからな。」

何より摩央姉ちゃんが言つたんだ、その…初めてキスをする時に、同じ高校に入ったのに話しかけもしないのなんてもう嫌だつて、これから優しくしてくれるならキスしてもいいよつて、な。…内緒だぞ、こんなこと

「…うん」

今日は菜々もずいぶん摩央姉ちゃんの洗礼を受けたからな、これくらい話してもいいだろう。

「あとね、わたし、昨日のことでお兄ちゃんがお兄ちゃんじゃないような気がしちやつてたの」

「それは本当に悪かつたよ。僕のせいで傷つけちゃつたからな」

「でも、お兄ちゃんのキスはわたしの知らない人じゃなくて摩央お姉ちゃんのキスだつて知つて、ちよつと安心したよ」

「…それも内緒だぞ、クラスメイトとかに絶対話すなよ！」

「話さないよ、摩央お姉ちゃんに迷惑かけちゃうもん」

「僕はどうでもいいのか！」

「えへへへ」

菜々の無邪気な笑いが、口止めをお願いした側としてはちよつと心配だけど、とにかく元氣になつてくれたようでそれはホツとした。

「…わたしもいつか誰かと、お兄ちゃんと摩央お姉ちゃんみたいな関係になれるのかなあ」

「僕と摩央姉ちゃんみたい、というのがどういふ部分を指すかによるけどな」

「えー、じゃあ、お兄ちゃんと摩央お姉ちゃんつて、自分たちではどういふ恋人だと思ふ？」

「それは…内緒」

「えー、ずるいー！」

「今日はもう内緒の話や体験をいくつもしただろう？ その中にヒントがあるから、後は自分で考えてみな」

「そんなの無理だよー」

文句を言う菜々が尖らせた唇の先を人差し指で弾いて、

「無理じゃないよ」
と言う。そう、無理ではないと思ふぞ。何しろ、あのキスは一生忘れられないと思ふから。あれこそ、僕たちの関係の象徴なのだから。



なんかまた著しくえろさに欠ける妹で
すみません。
菜々ではじめて妹のえろさを知りました。
ああこれはえろいわ。
妹ってこんなにえろい存在だったんですね…。

◎ 野川まらのあの声がか
キライだったはずなのに..

かえっ。

あとがき

もしこの本がなるみちゃんオンライン一本になっていたら、私は深夜バスで香川に行って本場の讃岐うどんを取材するくらいの意気込みでした。
…何のために？

さて次の本は、また『キミキス』の予定。もう次回作が出るまでずっと『キミキス』本、単行本が出たら『成恵の世界』本、かねこ氏に何かが降臨したら『モンスターファーム』本、という感じで。

それではまた。



誌名：キスは轢き逃げの
始まり

発行：自爆メカ

発行日：2006.8.13

印刷：トム出版

面

爆

X

力

